

## 大学における AI 活用型日本語教育の実践事例 — 翻訳授業を対象として —

陳祥（日本国際学園大学）

### 1. プロジェクトの背景

AI 技術の急速な発展に伴い、機械翻訳の精度は飛躍的に向上し、その使用場面も拡大している。日本語教育の現場においては、翻訳アプリの使用が学習者の自律学習や言語習得、学習効果に与える影響について活発な議論が行われている。ここ数年では、日本語教師は翻訳アプリを授業に取り入れ、その指導法や教育的効果に関する実践的研究が着実に蓄積されつつある。中でも、翻訳アプリを活用した学習活動の題材として、文化的要素を含む内容への関心が高まりつつある点に注目したい。

筆者は約2年にわたり日本の私立大学における日本語教育に携わり、日本語教師および多国籍の日本語学習者と継続的に関わってきた。近年、留学生受け入れ政策の拡充を背景に、多国籍の日本語学習者は今後さらに増加することが見込まれている。こうした多国籍の日本語学習者は、日本語能力の程度に応じて、日本での生活場面やコミュニケーション場面において翻訳アプリを身近な学習支援ツールとして手軽に利用している。さらに、日常生活での使用に慣れた結果、学習場面においても翻訳アプリを頻繁に使用する学習者が見られる。このような状況から、その教育的影響は看過できないものとなっている。

すなわち、日常生活と密接に関わる場面において翻訳アプリが頻繁に用いられていることから、学習者の関心を喚起しやすく、語彙や表現の習得を促進する教材としての可能性が指摘されている。一方で、授業における機械翻訳ツールの利用が増加するにつれて、その高い利便性と同時に、誤訳や文脈理解の不足、表現の不自然さといった課題も顕在化している。これらの点を適切に把握したうえで、翻訳アプリの利用を前提とした効果的な指導法を教育現場において確立することは、喫緊の課題である。

本プロジェクトでは、台湾における日本語教育の実践事例を調査・分析するとともに、授業観察および学習者の学習行動の記録を通して、AI 技術が日本語学習の質的向上にいかにか寄与し得るのかを多角的に検討する。さらに、現行の日本語教育に対する学習者の認識および AI 技術・翻訳ツールの活用実態を明らかにし、その成果を踏まえて筆者自身の教育実践への応用可能性を検討することを目的とする。

### 2. 本プロジェクトの目的

本研究の目的は、AI 技術の活用が教育現場に

もたらす効果を検証することであった。

具体的には、日本語教員にとっては学習者一人ひとりの理解度や習熟度に応じた個別指導を可能にする点、日本語学習者にとっては自律的かつ効率的な学習を促進し得る点に着目し、その有効性を調査した。

さらに、本研究の成果を踏まえ、筆者自身の教育実践への応用可能性を検討するとともに、今後その実践的展開を図る。

### 3. プロジェクトの概要

#### 3-1 プロジェクト全体のスケジュール

本活動は、以下の手順に沿って実施した。現地での活動期間は、2025年9月13日から9月27日までの約2週間である。

表1 活動スケジュール

月	活動内容
7月 8月	翻訳授業に関する文献調査 現地教師と活動の打ち合わせ 質問項目検討・作成
9月	現地渡航（台湾） 授業見学 アンケート実施・回収 学習者および教員との意見交換
10月 11月	考察・分析 現地渡航（韓国） 発表及び意見交換
11月 12月	発表後の議論を踏まえた再考察 ワークショップの準備
1月	ワークショップの実施
2月	報告書の作成

#### 3-2 現地協力機関について

本研究は、新北市に所在する私立大学1校の協力を得ており、調査および教育活動を実施した。当該大学では、学部生を対象とした日本語科目が体系的に開講されており、複数名の教員が日本語教育を担当している。日本語専攻を選択している学部生は、週3コマ程度の日本語科目を履修しており、基礎的な日本語能力の育成に加え、段階的に応用的な学習へと進むカリキュラムが構成されている。

その中でも、2年次には翻訳に関する選択科目が設けられており、日本語と中国語の対照を通して、語彙や表現の使い分け、文脈理解を重

視した学習が行われている。本研究では、こうした教育環境のもとで行われている授業を対象に、学習者の学習行動や翻訳ツールの使用状況を観察・記録し、AI 技術を活用した日本語教育の可能性について検討を行った。

### 3-3 見学科目について

今回の渡航期間中は、下記の科目を見学した。なお、各科目の対象学生についても併せて記載した。

表2 見学の科目

科目名	時間割	対象学生
進階日本語	月・木	2年生
進階日本語翻譯	火	3年生
日本語言語學概論	木	4年生

1科目あたりの授業時間は50時間で構成されている。見学にあたっては、教師の指導方法、授業運営の流れ、学生への声かけや注意事項の提示の仕方などに重点を置き、授業中の様子を詳細に観察した。

また、授業終了後には担当教員へのインタビューを実施し、授業設計の意図や指導上の工夫、学生の学習状況に対する見解などについて話を伺った。

### 3-4 現地での活動内容

#### 3-4-1 翻訳使用に関する調査

本調査では、日本語専攻に在籍する大学2～4年生を対象に、Google フォームを用いたオンラインアンケートを実施した。

質問項目は、学生が翻訳ツールをどのように利用しているかを多面的に把握することを目的として「①翻訳ツールの使用状況」「②使用感と効果について」「③気づき・学び」の三つのカテゴリーに大別して設計した。アンケートはすべて日本語で作成し、自由記述欄については日本語または中国語での回答を可とした。

これは、回答者がより自然に自分の考えを表現できるよう配慮したものである。

表3 アンケートの質問項目

【翻訳ツールの使用状況について】
1. どの翻訳ツールを主に使用しましたか？
2. その翻訳ツールを使用する理由は何ですか？
3. 翻訳ツールを使用した頻度は？
4. どのような場合に使用しますか？
【使用感と効果について】
5. 翻訳ツールを使って、どのような点が便利だと感じましたか？

6. 翻訳ツールを使用することで、語学力や理解度にどのような影響がありましたか？

7 語学力や理解度に対して、どのような影響があったと感じますか？

#### 【気づき・学び】

8. 翻訳結果と自分の訳を比較し、違和感を感じたことはありますか？

9. 翻訳結果に違和感を感じたときは、どのように対応しますか？

10. 翻訳ツールがあったことで、学習へのモチベーションに変化はありましたか？

#### 【自由記述】

その他、授業や翻訳ツールに関して感じたことがあれば自由にご記入ください。

また、調査に際しては、回答者の心理的負担を軽減し、率直な意見を得るため、以下の点を明確に伝えた。回答は完全に任意であり、回答しないことによる不利益は一切ないこと個々の回答内容を担当教員や指導教員に提供することはなく、匿名性が担保されること調査結果が成績評価に影響することはないことポジティブな意見・ネガティブな意見を問わず、すべての回答が研究の重要な資料となることこれらの説明を事前に提示したうえで回答を募った結果、学生が安心して参加でき、より率直で多様な意見を収集する環境を整えることができた。

#### 3-4-2 翻訳授業に関する調査

本研究では、翻訳ツールの使用実態に関するアンケート調査に加え、大学における翻訳関連授業を対象として、教材の選定および教師の指導法についても調査を行った。

当該授業では、主要教材として黒柳徹子著『窓ぎわのトットちゃん』が用いられており、受講学生の多くが母語とする中国語による翻訳書を7種類準備した。

これらは訳者および出版社が異なっており、学生が訳文の表現上の差異や翻訳方針の違いを比較・検討できるよう工夫されている。

表4 授業で使用する翻訳書教材

翻訳者	出版年	タイトル
1. 徐思	1981	『窗邊的小華』
2. 李雀美	1982	『冬冬學校生活』
3. 朱佩蘭	1982	『小徹的學校生活』
4. 力爭	1983	『窗口邊的荳荳出版社』
5. 朱曉蘭	1988, 2001	『窗邊的小荳荳』
6. 蕭曉	1989	『窗口邊的荳豆』
7. 黃靖淑	1992	『窗邊的小荳豆』

授業では、まず教員が特に誤訳が生じやすい箇所として、「擬音語・擬態語」や、日本独自

の生活文化・学校制度、人名・呼称などの「文化用語」を提示する。これらは中国語へ直訳すると意味が伝わりにくく、訳者によって大きな表現の差が出るため、学習者にとって分析しやすい教材となっている。

次に、学生を複数のグループに分け、章ごとに担当範囲を割り当てる形式を採用している。各グループは、原文と複数の中国語訳を比較・照合し、訳語の相違や表現上の工夫、文化的背景の反映のされ方などについて討論する。討論した内容を学習管理システムの指定箇所に掲載し、受講者全員で共有したうえで、各グループ1名を代表として発表を行う。



図1 教員が講義を行っている様子

グループ活動では、まず原文と訳文を精読し、語彙選択や文構造、表現上の差異に着目しながら比較を行い、そこから生じる気づきや違和感を整理する。そのうえで、各訳語が選択された背景や意図を検討するとともに、翻訳アプリの訳語との相違点を分析し、語感や文脈、文化的要素の観点から、より適切と考えられる表現について改善案をまとめる。これらの過程をグループ内で共有・討論することで、翻訳に対する多様な解釈や判断基準に触れながら、多角的な視点から自らの翻訳スキルを省察し、その向上を目指している。

発表では、グループ内での討論を通して得られた考察や改善案を全体で共有し、訳語選択の根拠や表現上の工夫について説明する。さらに、他グループや教員からの意見・質問を受けることで、自身の翻訳の妥当性や限界、表現の多様性について再考する機会とし、翻訳に対する批判的思考力や表現力の深化を図っている。



図2 学生が発表を行っている様子

このように、本授業では誤訳が生じやすい箇所を中心に具体例を提示し、訳本および翻訳アプリとの比較を通して、語感や文化的ニュアンスの再現の難しさを学生自身が体験的に理解できるような学習活動を設計している。

## 4. プロジェクトを通して得られた成果

### 4-1 成果①韓国発表

本プロジェクトの成果の一つとして、韓国で開催された「東アジア日本研究者協議会第九回国際学術大会」において、本プロジェクトの協力教員を含む台湾・韓国・日本の日本語教育関係者が参加し、「近現代日本文化と言語の多様性」をテーマとしたパネルディスカッション形式の発表を行った。

パネルでは、翻訳、観光、言語、文学、思想といった多様な視点から報告が行われ、討論では、東アジア地域に共通する日本語教育上の課題およびその背景について活発な意見交換がなされた。本パネルを通じて、本研究の成果を国際的かつ多角的な視点から検証するとともに、今後の日本語教育実践および研究に対する示唆を得ることができた。

これにより、本プロジェクトの教育的有効性と課題を国際的文脈の中で再考する機会が得られた。



図3 筆者が発表を行っている様子

### 4-2 成果②調査結果

本プロジェクトを通じて、AI技術および機械翻訳の教育的活用に関して、多方面にわたる成果を得ることができた。主な成果は以下の通りである。

#### (1) 翻訳ツールの使用頻度・目的・依存度に関する学生の実態

Google フォームを用いた学生調査により、日本語専攻学生がどの場面で翻訳ツールを使用しているか、頻度・目的・依存度・課題認識などを定量・定性的に把握できた。特に、翻訳活動を通して日本語表現に対する学習者の気づきや学びの効果が確認できたほか、翻訳ツールが学習行動の細部にまで浸透し、学習・勉強の場面で活用されている実態を改めて明らかにすることができた。

## (2) 機械翻訳の利用認識と学習効果に関する学生の意識

選択回答や自由記述等を分析した結果、学習者が機械翻訳に対して抱く利点（効率性・理解補助）と懸念点（誤訳、語感の欠如、文化的背景の喪失）の双方が明確になった。機械翻訳の「使い次第で学習効果が変わる」という学生の認識も浮き彫りとなった。

## (3) 授業観察を通じた指導法の分析

翻訳授業（教材：『窓ぎわのトットちゃん』）の見学および教員インタビューを通して「複数の中国語訳を比較する手法」、「グループごとの担当範囲設定と発表」、「誤訳が生じやすい領域（擬音語・擬態語、文化語彙など）」の重点指導といった、効果的な授業デザインの特徴を整理できた。特に「比較翻訳」の活動が、学習者の批判的思考を育てる点が重要な知見として得られた。

## (4) AI ツールを併用した授業手法

授業場面では、学生がAIツールを用いて訳文をチェックする姿も観察され、適切な場面選択と教師の指導があれば、学習補助として有効に機能する可能性が示された。また、AIによる訳例・パターン提示が、文脈理解や文化的背景の検討を促す教材として活用できる可能性が確認された。

### 4-3 成果③ワークショップ実施

最後に、本プロジェクトの成果の一つとして、台湾の現地教員を招聘し、来日していただいたうえで、翻訳授業への実践的活用を行った。授業では、台湾の実物資料を用いながら、多国籍の学習者同士が相互にコミュニケーションを図り、主体的に考察し、その成果を発表する活動

を実施した。これにより、言語運用能力の向上にとどまらず、異文化理解の深化や協働的学習態度の育成など、多方面にわたる教育的成果を得ることができた。



図4 学生が発表を行っている様子

## 5. まとめと今後に向けて

本プロジェクトでは、台湾における翻訳授業の実践事例を通して、教員による指導上の工夫や、学習者の学習の質的向上が見られることが明らかとなった。

今後は、AIを活用した日本語翻訳教育における実践的指導法の体系化を目指し、その成果を授業実践へ段階的に導入していく予定である。特に、本研究で考察対象とした文化と密接に関わる食関連語彙の機械翻訳を一つのモデルケースとし、当該教材を用いた具体的な指導案を作成する。あわせて、日本語と多国籍学習者の母語との対照を通して語義・用法・文化的背景への理解を深め、学習効果の向上を図る。

さらに、これらの実践を通して得られた成果を実証的に検証し、他教育機関との連携のもと、多様な教育手法を取り入れた個別指導および学習促進の効果について、継続的な調査・分析を行う可能性を検討していきたい。

## 参考文献

- (1) イスマイル スザナ (2006) 「リソースに対する学習者の意識や活用の方法に関する事例研究—自律学習の支援に向けて—」『日本語言語文化研究会論集』2 pp. 137-163.
- (2) 大須賀直子・真野千佳子 (2003) 「学生による翻訳サイトの利用実態と問題点」『文教大学国際学部紀要』13(2) pp. 133-144.
- (3) 張莉, 石井皓太, 北英彦, 高瀬治彦 (2018) 「日本語翻訳における誤り探しによる協同学習の実践」『コンピュータ&エデュケーション』45, pp. 109-114.
- (4) 寺門芽衣・菅谷克行 (2024) 「日本語学習におけるAI機械翻訳の活用方法」『CIEC 春季カンファレンス論文集』15, pp. 15-21.
- (5) 副田恵理子, 平塚真理 (2011) 「日本語理解を支援する外的リソースの使用実態調査：初級学習者の翻訳ツールの使用過程に焦点をあてて」『北海道大学留学生センター紀要』15, pp. 1-19.
- (6) 林玉恵 (2021) 「日中機械翻訳における美味しさを表す表現について—翻訳指導の実践から—」『台湾応用日語研究』28, pp. 1-32.
- (7) 林玉恵 (2010) 「日中翻訳における文化に関する語彙の訳語選びの問題点—『窓ぎわのトットちゃん』を例として」『日本語学最前線』pp. 205-224.
- (8) 和文ウェブサイト 国際交流基金 (2021) 『日本語・日本語教育を研究する 第49回 日本語教育におけるトランスレーション活動の導入』  
<<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/202112.html>> (2025年4月12日)
- (9) Butler, D. L. (2002) Individualizing instruction in self-regulated learning. *Theory into Practice*, 41 (2), pp. 81-92.